令和2年2月26日　（水）
熊本日日新聞（朝刊）　29面

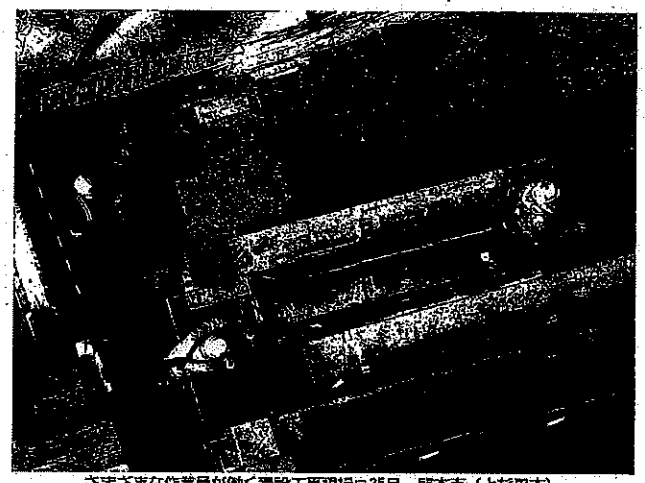
工事現場 拡大防止に壁

新型肺炎

熊本市の男性作業員2人感染

複数社出入り「対策分からない」

新型コロナウイルスの感染が24日に確認された熊本市東区の50代の男性土木作業員は、既に感染が確認されていた別の50代男性と同じ工事現場で働いていた。複数の会社や個人の作業員が集まる土木や建築現場では、一人一人の細かな体調を把握するのは困難だ。業界は感染拡大防止や作業員の健康対策に頭を悩ませている。【1面参照】



さまざまな作業員が働く建設工事現場＝25日、熊本市（上杉朋太）

25日、同市西区のマンション建設現場。多い時は150人ほどが、それぞれの会社などから現場に集合し、作業する。男性現場監督(25)は「労災防止には細心の注意を払うが、感染拡大対策は、どうすればいいのか分からない」と困惑する。

マスクを徹底する作業員も多い。同現場の男性電気作業員(53)は「息苦しいし、メガネが曇る。ウイルス対策と言われても…」。

熊本市感染拡大対策課によると、感染が確認された2人は阿蘇地域の工事現場で働いていた。最初に確認された男性は、屋外作業や車内、屋食などで計17人との接触が確認されている。

県建設業協会によると、公共事業などの現場は「元請けや下請け、孫請けなどの多重構造。複数の会社の社員が入り込み、作業員の入れ替えも頻繁にある。作業員の人数や作業内容は元請け会社が把握するが、健康管理などはそれぞれの会社だ。「万が一、集団感染が発覚したら経路や接触者の特定、共有は難しい」という。

県土木部監理課は25日、工事関係の式典やイベントの開催について再検討するとともに、野崎哲司・同課長は「再度、感染拡大予防策のそれぞれの現場までの浸透、徹底を求めたい」と、文書を建設関係団体に出して、注意喚起した。

阿蘇地域など県内各地では熊本地震からの災害復旧工事が続き、大手ゼネコンをはじめ県内一円から業者が入っている。年度末に向けて公共工事は繁忙期。今後、感染が広まった場合に人手不足を懸念する声もある。

阿蘇市の建設会社の男性役員(70)は「もっと詳しい情報を出してもらわないと対策も取れない。阿蘇地域の工事現場はみなが疑心暗鬼に陥り不安がっている」と訴える。「2月、3月は特に忙しい時期だ。もし感染が広がったら現場は回らなくなる」（前田晃志、堀江利雅、太路秀紀）